違う考え持つ人への圧力目立つ

表題は毎日新聞 10 月 3 日夕刊「松尾貴史のちょっと違和感」である。同じく違和感と怒りを感じていたので紹介しておきたい。

いわゆる「戦争法」に反対している SEALDs(シールズ)の中心的メンバーの一人、大学生の奥田愛基さんと家族を殺害するという脅迫状が彼の通う大学に送りつけられたそうだ。この犯人は一体何がしたいのだろうか。

自分と違う考え方を持つ人物の活動を、恐怖や暴力で封殺しようという発想が、どんな場合であっても許されるはずがない。そして、こういう卑怯な手法をとれば、自分の「お仲間」にどれだけ大きな迷惑がかかりダメージを与えるかということが想像すらできないばか者である。

SNS でも、奥田さんに対して「政治活動をするならそれぐらいの覚悟があって当たり前だろ」などというばかげた二次的な攻撃が、ネット右翼からおびただしく寄せられている。そういう攻撃は、多くの場合相手の主張に論理的な隙がない事で人格攻撃に走らざるを得ない事がばれてしまっている。そして、その裏側にはなぜか嫉妬のような感情が見え隠れするのだ。デモで目立ったり、テレビに出演する機会が多くなったりして、「あんな普通のやつがなんで持ち上げられるんだよ」という卑劣な感情が引き金になっているのだろうと想像する。

今回のようなことがあると、信念を持っている者にとっては、萎えるどころか逆に燃え上がるエネルギーにもなるのだということが分かっていない。「それぐらいの覚悟」がないのは、匿名でそんな嫌がらせをしてくる方だということは火を見るより明らかではないか。巨大組織や権力者に対する告発で匿名にならざるを得ない場合と訳が違う。脅迫された大学生に対して追い打ちをかけるという卑劣な行為をするにあたって、自分が責めを負わないための逃げとして匿名にしているのだ。どこまで卑怯なのか。

ネット上は、奥田さんのような勇気ある活動をしている人たちに対する嫌がらせ、罵詈雑言、中傷、捏造ストーリーが溢れかえっている。もちろん、応援している声の方がよほど多いとは思うが、人間というものは、嫌がらせが少数派でもダメージは受けるも

のだ。総理大臣の顔にちょび髭を描いたのも違法だろうが、どちらが悪質かは歴然としている。早急に逮捕して厳罰に処してもらいたいものだ。

自分の主張に対して異論が出ないように圧力をかける人が最近目立っているように感じるのだが、そういう空気を拡散させている人が国の真ん中にいるのではないかと勘ぐりたくなることが多い。

（2015 年 10 月 6 日）